

英語遠隔授業に対する学習者の認識：  
大学における事例

Students' Perceptions of Remote EFL Lessons:  
A case in a higher education context

小林潤子  
駒澤大学

**Abstract**

The purpose of this study, which spans approximately eight months, is to inquire into students' perceptions of remote EFL lessons conducted via Zoom. Data were obtained from university students who took English lessons over a period from May to December in 2020, when virtual classes were substituted for in-person ones because of the spread of COVID 19. Twenty-six first-year students answered questionnaires in July and December. Also, five sophomores responded to interviews in July 2021. The researcher used a Narrative Frame to collect data and the Grounded Theory Approach to analyze them. The results revealed that students identified both positive and negative aspects of online learning.

キーワード: remote lesson、 online、 Zoom、 perception、 COVID19

科目名	①英語 IB (Reading /Wring) (1年生必修科目) ②英語 IIB (Reading /Wring) IIA (Listening/ Speaking) (2年生必修科目)
対象者とクラス人数	①2020年度大学1年生 21名、27名 (使用データ 26) ②2021年度大学2年生 5名
学習の目標	①IB 英語の読解力・作文力を高める ②IIB 英語の読解力・作文力を高める IIA 英語の話す力・聞く力を高める

## 1. はじめに

COVID19 に直面して、多くの教育機関は、オンラインやオンデマンドなどのシステムを使って遠隔授業を実施した。これまでに指摘されてきた遠隔講義の利点や問題点を簡単にまとめると次のようになる。

利点はその柔軟性であり、多様性である。感染の可能性を減らすことができること、遠隔からの参加が可能なこと、通学時間が節約できること等が考えられる。欠点としては、接続障害、機器の問題がある。また、学生と授業者、学生同士の相互のコミュニケーションの取りづらさや難しさなども指摘されている（山田, 2021 ; Serhan, 2020）。この実践の目的は、緊急事態の中で英語を学習することに対し、上記のような長所短所に関して学生自身がどのような認識を持って取り組んでいたのかを理解することである。

### 1.1 主要な用語の定義

遠隔講義の形態としては、Zoom オンラインの形態を対象とした。この実践による調査では、学生が遠隔講義に関して、どのように「感じていたか」「どのような気持ちで取り組んできたか」を理解したいと思っている。こうした学生の心的状態をここでは「認識」(perception)と呼び、この認識に複数の側面があるとの前提に立つことにする。本実践の調査では、(1) 技術面、(2) 学習、(3) 社会的側面、(4) 学生生活の 4 側面を扱う。Macintyre et al. (2015) は、感情と第二言語学習に関して、プラスに働く感情 (positive-broadening power) は学習者が将来の自分自身の状態を想像する力となる、と述べている。また、Miyahara (2015) は、“... recently the relationship between language, culture, and identity has increased the awareness of the role of affective factors: emotions are now considered to play a major role in the e-learning process” (p. 44) と述べ、e-learning における情意面の役割の大きさを指摘している。さらに、上記 (3) の社会的側面については、Van Kleef et al. (2016) は、「感情は本質的に社会的側面があり、他者の様々な影響を受ける (ページ記載なし)」とまとめている。本実践では、社会問題、特に COVID 19 によって引き起こされた感情的な心の状態やそうした感情の推移を研究するとともに、彼らが学習や講義に向かう態度などの変化を分析する。

方法論としてこの緊急事態における理論を分析するために、グラウンデッドセオリーアプローチ (Strauss & Corbin, 1998) を選択した。オンラインで約 8 か月間講義に参加した学生の学習の実態を理解し、彼らの認識を理解して、説明 (理論立て) をしようというものである。データの収集は、ナラティブアプローチの理論に基づき、ナラティブフレームを使用して行った (資料 2 参照)。このフレームは、未完成な文を完成する形で作成した

ストーリーテンプレートである (Barkhuizen et al., 2014, p. 45)。このフレームは、多くの参加者からのデータを収集するのに使われ、参加者がみずからにとってはなじみのない研究内容を書くのに有効であるとされている。

## 2. 先行研究と実践の目的

### 2.1 先行研究

著者が参考とした先行研究の範囲では、論文を 4 種類に分類することができた。レッスンの導き方に関するもの (大谷, 2021; 東矢, 2021)、講義スタイルに関するもの (岩尾, 2020)、遠隔教育の有効性に関するもの (Kawasaki et al., 2021; 高橋, 2020; 市川他, 2021; 石川他, 2021; 田村, 2021)、学生の態度に関するもの (Serhan, 2020; Loton et al., 2021) である。

遠隔教育の有効性については、Kawasaki et al. (2021) が、2019 年度の対面授業と 2020 年度の緊急遠隔授業を比較し、遠隔授業が対面授業と同じくらい効果的であることを確認した。また、高橋 (2020) も、オンライン授業でも学生には対面授業とあまり変わらない印象を与えることができる (p. 114) と述べている。学生の態度に関しては、Serhan (2020) の報告によれば、学生たちは遠隔授業に対して否定的な考えも持っている。利点は理解しながらも、人間関係の構築のしにくさなどをあげている。Loton et al. (2021) は、2020 年度の学生によるアンケートの結果を、過去 3 年間の結果と比較して、学生の満足度はプラスに推移したとの結果を得た。学生たちの 2020 年度のオンラインでの学習に関わる質的研究がいくつかある。Huy (2021) は、focus group interview を分析した。Zoom を使用した英語授業に関わる要素として 5 つの factor (Surroundings, Teacher, Feelings, Inefficient strategies to study online, Student role) をあげている。他にも多くの研究者がこの時期の学習や学生の様子を分析・報告している。

### 2.2 目的・この実践で調査したいこと

緊急事態宣言を受けての大学におけるオンラインレッスンをテーマにした研究の多くは、研究者や授業者の観点からのものである (大谷他, 2021; 岩尾, 2020; Kawasaki et al., 2021 など)。ほとんどの研究は 2020 年度の最初の学期にのみ実施された (Serhan, 2020; Loton, et al., 2021 など)。本実践の目的は、オンライン授業についての学生の認識が、オンライン授業の進行にしたがってどう変化したかを調べることである。こうした授業の必要性が急激に高まっている現在、学生の認識から得られる教育的示唆は貴重であると考え

られる。

先行研究の中には学生の講義に対する態度や姿勢などを分析したものもあり、特に質的研究では、本実践におけるものとは異なるアプローチ方法を用いて学生の心情について研究したものもある。本実践では 2020 年度の前期と後期という期間の中で、オンラインの講義に学生達が学習（特に英語学習）に対して持った認識を分析した。調査で明らかにしたい項目は次の通りである。

リサーチクエスチョン：

オンライン授業に対する学生の認識は、授業が進行するにしたがい、同一年度の 7 月から 12 月にかけてどう変化したか。具体的には、(1) 技術面に関わる認識、(2) 学習に関する認識、(3) 社会的側面に関わる認識、(4) 学生生活に関わる認識、の 4 側面における変化はどのようなものであるか。

### 3. 実践の概要

参加者は、東京都内の私立大学において 2020 年度に英語 IB を受講した 26 名（48 名の参加者がいたが、比較する項目について、7 月と 12 月の両方に記載していた参加者は 26 名であった）、および 2021 年度、英語の必修科目である IIB (Reading/Writing) と IIA (Listening/ Speaking) のクラスの中でインタビューに応募してくれた 5 人の 2 年生である。IB は 1 年生の英語の必修科目で Reading と Writing を学ぶ。講義はすべて Zoom を使って行った。参加者はみな著者が週に一度担当している授業の学生である。

前期 7 月の最終の講義で、参加者に「英語と私」と題したナラティブフレームで英語の学習や遠隔講義などに関してコメントを記載してもらった。後期の最後 12 月（2020 年度）にはほぼ同様のナラティブフレームに回答を依頼した。今回使用したのは、そのすべての内容ではなく調査に関連する部分のみである。さらに 2021 年度には、5 人の 2 年生にインタビューを行い、2020 年度の学習経験について話を聞いた。この 5 名は、2020 年度の英語 IB 受講の学生とは別の学生である。データの収集に当たっては、調査の内容は成績などには一切反映しないこと、個人情報かわからない形で使用することを確認した。インタビューに答えてくれた学生にも同様の説明を行った。

### 4. 分析結果

分析の手順は次のとおりである。集計されたデータは前期と後期について別々にグラウンデッドセオリーアプローチの手法で分析をした。もとの記載事項からのコーディング後に

データを切片にした。各切片には切片番号をつけた。内容によって同一の記述や近い記述をカテゴリーにまとめ (axial coding)、さらに理論を分析した (selective coding)。インタビューに関しても同様な手法を用いて分析をした (資料 1 参照)。

分析の結果、5つの要素 (理論) を読み取ることができた。詳細は 4.1 以下に記載する。

- 1) オンラインの使用に関する項目では、この状況の中で次第にオンラインでの利点や快適さを理解していったと思われる記載が多い。
- 2) コミュニケーションに関しては、前期に比べるとコミュニケーションの取りづらさはやや解消したものの、オンライン独自の問題であるやり取りの難しさは、後期末までに解消できていないようである。
- 3) 英語学習に関しては、学生たちが努力して継続した様子が窺える。
- 4) グループ学習に関しては、学生たちが協働学習の利点を理解して、特に後期にはよく協力して行った様子が書かれている。
- 5) 学生生活に関しては、遠隔授業の気軽さ・安全性・時間の有効利用などが述べられた。

#### 4.1 1年生のナラティブフレームによる回答の分析

以下 2020 年度のナラティブフレームによる回答の分析結果を報告する。斜体字の部分は、学生の記載のうち極力もとの言及を尊重してある部分である。

オンラインの講義に関しては 2 回とも記載が多く、前期利点 25 例、欠点 12 例あった。

<前期利点> (切片番号 15) 今は *Zoom* で授業を受けていますが、私は授業を受けやすいです。

<前期欠点> (切片番号 62) ...*Zoom* だと話していない人の表情にまで気を配ることは難しかったです。

後期は利点 45 例、欠点 9 例であった。特に利点に関しては、*Zoom* に関するもの 6 例、オンラインの快適さに関するもの 21 例、講義の快適さに関わるもの 18 例であった。

<後期利点> (切片番号 61) *対面* じゃなくても楽しく授業が出来ることに驚きました。

<後期欠点> (切片番号 1) オンライン授業というものがこれほど大変だとは思っていませんでした。

英語学習については、学生たちは困難さよりもオンラインで英語の勉強ができるという点に気づいて前向きに受け止めている。前期の記載は 9 例、後期にはその数が増えている。

<前期> (切片番号 14) *英語はオンライン授業でも知識を深められるのだと*感じる事も出来ている。

後期に関しても 20 例の記載があり、「課題が多い」という不満以外にはマイナスの記載はなかった。<後期> (切片番号 105) *英語は楽しんで学んだ者勝ち*ということです。

コミュニケーションの障害や取りづらさに関する記載は、前期・後期ともに多かった。  
 <前期> (切片番号 22) 機材トラブルなどで先生の指示を聞き逃す、ということもある。  
 <後期> (切片番号 103) 他者との交流が大変だったと感じています。

グループでの学習については、前期はグループに関する記載は 4 例あったが、後期は 29 例あった。信頼性や意欲、安心感という内容でまとめることができる。

- 1) 同一グループ内での信頼が高まる (切片番号 75) 友達とはあったことがないが信用できる仲間ができた気がします。
- 2) 意欲にも影響 (切片番号 94) 後期になってクラスの皆のグループセッションへの参加意欲が高まったような気がしています。
- 3) 安心感 (切片番号 159) 見知った面子と一緒に授業を受けられることはやはり安心できる要素でした。

生活に関するもの、その他の項目については、前期後期とも記載の数は少ないが、  
 <前期> (切片番号 19) 教室での講義と比較すると通学時間が省けるという大きな利点があると考えます。

<後期> (切片番号 132) 個人的には学校に行かなくて済んだので楽でした。  
 といったリモートの学習の利点があげられた。また、感染が多い地域へ行くことの怖さをあげていた。リモートをしたことが将来に役に立つという記載もあった (切片番号 102)。

## 4.2 インタビューの分析

遠隔講義については、2020 年度後半からいくつかの講義で、Zoom や Meet で授業が開始されたということであった。その有効性について学生たちは次のように述べていた。

(切片番号 70) あの勉強したいと思うならば、そのズームとかで。そのやったほうが良いんですけど...

反面その中で苦勞については、次のように述べていた。

(切片番号 59) 孤独だったのがあります。何したらいいのかわからない。

英語学習に関して、講義で出された課題・学習については、学生は英語学習以外の一般事項についても述べている。課題が多いこと、本当の学習になっているのかとの疑問 (切片番号 133)、課題のやり方への戸惑い (切片番号 143)などを述べていた。講義の工夫についてのコメントもあり、授業者の工夫をポジティブに受け止めていた。

(切片番号 34) ちゃんと評価してくれてるって気持ちもある。

コミュニケーションについては、学生たちは会議システムの中でやりとりができたこと (切片番号 24)、取りづらさ (切片番号 111)などを述べている。

グループ学習・活動については、利点ばかりでなく、「わからないことがあると時間を無

駄にしてしまう」というマイナス面にも言及があった（切片番号 76）。

（切片番号 112）グループワークとかが多いじゃないですか。...友達をつくることができ  
たんですけど...

その他生活の利点に関しては 1 年生の内容と似た言及であった。時間の有効利用、孤立感、だらけなどを述べていたが、

（切片番号 89）ほかの世代で楽しめたのに、今ぼくたちの世代が楽しめてないかなんか？  
残念だなと思います。

という感想もあった。しかしながら、この事態の中で、不安やわからないことがあるとメールで担当の教授に連絡を取れることから来る安心感も述べられた。

（切片番号 120）...連絡相談を通せば絶対話せるじゃないですか、先生と一対一で...

2021 年度の講義について聞いたところ、2021 年度（2 年生になってから）は、教室とオンラインを同時に行っているハイブリッド授業の時期であったが、

（切片番号 50）やるなら完全に対面がいいなあっ...

（切片番号 53）席がないんですね。とにかく廊下に。でなんか空き教室みたいなのを大学  
が開放している時もあるんですけど。なんか基本的には「静かに」みたいな感じなの  
で...

など、この時期の特徴を反映したと思われる意見が述べられていた。

## 5. まとめ

前述の 5 要素と各リサーチクエストンとについて、ここで結果をまとめたい。

### 1) 技術面に関わる認識について

オンラインの使用に関しては、参加者達は、前期からオンライン会議システム Zoom を使うことの利点と欠点を理解して講義に参加していた。自宅で安心して教室に近い形で講義に参加できる一方、質問がし難いこと、まわりの空気や雰囲気を読み取ることができないこと、なども述べている。後期は前期よりも多くの利点がのべられている。Zoom に関するもの、オンラインの快適さに関するもの、講義の快適さに関わるものなどである。高橋（2020）は「学生には対面授業とあまり変わらない印象を与えることができることが判明した。」(p. 112) とみずからの調査の結果を述べているが、本実践においても、学生たちは、遠隔講義に慣れてくるにしたがって、前向きにとらえて参加していたものと思われる。

### 2) 学習に関わる認識について

英語学習に関しては、「課題をやるにも困ることがたくさんあります。」というマイナスの記載もあったが、学生たちは、困難さよりもオンラインで英語の勉強ができるということ

に気づいて前向きに受け止めている。後期では、特にその記載が増えていて「楽しんで学習している」「快適に学習している」という回答があった。課題の多さや、困難さを述べている回答も多くあったが、「英語の力がのびた」という記載もあり、学生たちは努力して学習していたと言えるかもしれない。

### 3) 社会的側面に関わる認識について

コミュニケーションに関しては、Aguilera-Hermida (2021) が、“... students reported that the lack of interaction with professors and students was a challenge for them.”と述べているが、本実践の参加者達も意見の伝わり難さ、質問のし難さ、雰囲気伝わり難さ、などを後期にもあげている。機器の扱いの大変さや、Wi-Fiの不具合などが後期でも続いたが、後期の方のこうした記載が半分に減っていることから、学生たちが、機器の取り扱いに慣れ、オンラインであっても級友とのやり取りなどがしやすくなったと認識したもようである。

グループ活動に関する記述としては、前期は4例であったが、後期には29例と記載の数が多くなった。同一グループ内での信頼が高まったこと、学習意欲にも良い影響を与えたこと、安心感が持てたことなどが述べられた。この講義では、学生たちは一年間同一グループで活動し、協力して読解活動や発表活動などを行った。講義以外にも必要があれば自分たちでオンラインの作業をしていた。田村 (2021) は「受講者の3分の2 (66.7%) が、他の受講者や教員との一体感を感じられると回答している。」(p. 340) と述べている。本実践の授業も、コミュニケーションの機会の少ない中で、人間関係を作る機会を提供できていたかもしれない。廣森 (2006) は、関係性が動機向上の要素となると指摘<sup>1)</sup>しているが、本実践の授業も関係性を高めて学習の意欲を増進させる上で効果があったのかもしれない。

### 4) 学生生活に関わる認識について

この側面に関しては、通学時間の節約、遠隔授業に参加する気軽さ、感染対策などが挙げられている。また、授業に集中できたことや将来に必要な技術が身に付いたなど、ポジティブな記載が多かった。しかしながら、孤独感・孤立感を記載した学生もいる。Onwuegbuzie et al. (2021) は、“The most compelling meta-theme—[...]—is the mental health needs of students.”(p. 14) と分析結果を報告しており、学生の精神的な面のサポートは、大切な項目の1つであると考えられる。オンラインの会議システムを使うことによって、学生たちが能動的に講義に参加できるようになったこと、英語学習の効果を理解して前向きに取り組んだこと、コミュニケーションや通信機器に関する問題が後期に減ったこと、学生たちがグループの活動を通して後期までの間に良い人間関係を構築できたこと、などが明らかとなった。



リサーチクエストに対応する調査結果は以上の通りである。上記項目(1)から(4)を総括すれば、学生たちが、オンラインレッスンの可能性を理解し、次第に能動的に、また楽しさを味わいながら受講するようになったこと、および、様々な困難(通信の問題・機器の取り扱いの難しさ・コミュニケーションの取り難さ・孤立感など)をある程度克服することができたことが指摘できる。さらに、コミュニケーションの障害は残るものの、オンラインによる毎回の講義への参加やグループ活動などを通して、前期よりも後期のほうが積極的に学習に取り組めるようになったこと、それに伴いグループ内での信頼感も持つことができるようになったと思われること、オンラインの学習に対して、ある程度納得し、安心して取り組めるようになったこと、などをあげることができる。

### 6. 教育的示唆とリミテーション

本実践から得られた教育的示唆としては、次の項目をあげることができる。オンライン学習について肯定的なコメントをした例が多かったので、オンライン学習は今後とも活用する価値がある。グループワークを含む英語学習が円滑に進む、とのコメントがあったことから、教師は、オンラインの長所をさらに活かす研究を行うべきである。一方、質問がしにくい、といったコミュニケーション上の問題への指摘があったことを考えると、オンラインの状況のもとで授業内コミュニケーションがうまく成立するよう、対面の場合とは違った指導スタイルが開発されなくてはならない。教材や課題の作成などの分野で、今後深い研究が望まれる。石川他(2021)は「教員が、パンデミックの『おかげ』で授業を構成するスキルを向上させ、今では日常の一部になるなど成長を遂げたのだと思う。」(p. 6)と述べている。市川他(2021)も「これらの学びを生かすことにより、コロナ禍後には以前よりも進化した対面授業を提供することができるであろう。」(p. 226)とまとめている。オンラインのスキルを今後前向きに生かし、遠隔地や海外在住の学生に向けての対応や、登校できない学生などへの活用を考えるとできると思われる。

この実践のリミテーションとしては、「調査者と授業者が同じであることのデメリット」である。学生達が率直な意見を述べることの障害になっていたかもしれない。客観性を考えると調査者は参加者とは関係のない人がふさわしい(南浦・柴田, 2015)が、本研究では、調査の状況(緊急事態宣言中であったこと)や調査の都合(他のクラスに調査を依頼できなかったこと)から、このような形をとった。

また、同じ学年の極力レベルの似た学生からデータを取ろうとしたために、参加者の数も少なくなった。だが、パンデミック下での生活を真摯に振り返った多くの記載が得られたことに対し、参加者に感謝したいと思っている。

## 注

<sup>1)</sup> 学習者の内発的動機づけを高める方法として、自律性・有能性・関係性を高めることが重要であるとされており（廣森, 2006）、ここでは、グループ活動により、関係性が高められ動機に繋がった可能性がある。

## 謝辞

査読者の方と Dialogue 編集委員会より貴重なご助言をいただきました。深く感謝申し上げます。また多くの示唆をいただきました松坂ヒロシ先生に深く御礼いたします。

## 参考文献

- Aguilera-Hermida, A.P. (2021). College students' use and acceptance of emergency online learning due to COVID-19, *International Journal of Educational Research*, (ページ記載なし). [www.elsevier.com/locate/ijedro](http://www.elsevier.com/locate/ijedro)
- Barkhuizen, G., Benson, P., & Chik, A. (2014). *Narrative Inquiry in Language Teaching and Learning Research*. Routledge.
- Huy, N. D. (2021). Perceptions of EFL tertiary students towards the correlation between e-learning and learning engagement during the COVID-19 pandemic. *International Journal of TESOL & Education*, 1(3), 235-259.
- Kawasaki, H., Yamasaki, S., Masuoka, Y., Iwasa, M., Fukita, S., & Matsuyama, R. (2021). Remote Teaching Due to COVID-19: An Exploration of Its Effectiveness and Issues. *International Journal of Environmental Research and Public Health*, 18, 1-16.
- Loton, D., Stein, C., Parker, P., & Gauci, S. (2021). Remote learning during COVID19: Student satisfaction and performance. *UNIVERSITY REMOTE LEARNING*, 1-9, EdArXiv: A Preprint Server For The Education Research Community. [https://www.researchgate.net/publication/342686256\\_](https://www.researchgate.net/publication/342686256_)
- Macintyre, P., & Gregersen, T. (2015). Emotions that facilitate language learning. The positive-broadening power of the imagination. *Studies in Second Language Learning and Teaching*, SSLT 2(2), 193-213.
- Miyahara, M. (2015). *Emerging Self-Identities and Emotion in Foreign Language Learning: A Narrative-Oriented Approach*. Multilingual Matters.
- Onwuegbuzie, A.J., & Ojo, E.O. (2021). University students' experiences of learning in an online environment in COVID-19 pandemic: A meta-methods research study of

- perceptions and attitudes of South African students. *Journal of Pedagogical Research*, 5,4, 1-18. <https://doi.org/10.33902/JPR.2021472164>
- Serhan, D. (2020). Transitioning from Face-to-Face to Remote Learning: Students' Attitudes and Perceptions of using Zoom during COVID-19 Pan demic. *International Journal of Technology in Education and Science*, 4(4), 335-342.
- Strauss, A., & Corbin, J. (1998). *Basics of Qualitative Research: Techniques and Procedures for Developing Grounded Theory*. Sage Publications, Inc.
- Van Kleef, G.A., Cheshin, A., Fischer, A. H., & Schneider, I. K. (2016). Editorial: The Social Nature of Emotions. *Frontiers in Psychology*, 7, 1-5.
- 岩尾詠一郎 (2020)「授業の種類ごとの遠隔授業の課題～複数の遠隔授業形式での経験を通じて～」『情報科学研究所 所報』, 96, 11-15.
- 石川さと子・井上賀絵・登美斉俊 (2021)「新型コロナウイルス禍における遠隔授業への対応と対面授業実施に向けた取り組み—アンケート結果を交えたふり返り」『薬学教育』, 5, 9-15. <https://doi.org/10.24489/jjphe>
- 市川ゆりえ・小田登志子・小林かおる, エリック・シワック・ステファニー・トゥンチャイ・堀口優子 (2021)「一般教養英語科目における遠隔授業 —2020 年度教育現場の記録およびコロナ禍後への学び—」『東京経済大学人文自然科学論集』, 148, 196-229.
- 大谷杏 (2021)「新型コロナウイルスの影響による大学英語オンライン授業・実践、その評価と課題」『関西英語教育学会紀要』, 44, 21-39.
- 高橋絹子 (2020)「オンライン授業の有効性と課題」『大阪女学院大学紀要』, 17, 3-113.
- 田村岳充 (2021)「受講者アンケートから見る オンライン授業の効果と課題 —2020 年度前期開講, 英語科教育法Ⅱの授業を通して」『宇都宮大学共同教育学部研究紀要』, 71, 330-345.
- 東矢光代 (2021)「コロナ禍の遠隔授業における 3 つの実践の比較分析」『琉球大学欧米文化論集 = Ryudai Review of Euro-American Studies』, 65, 1-23.
- 廣森友人 (2006)『外国語学習者の動機づけを高める理論と実践』, 東京: 多賀出版 .
- 南浦涼介・柴田康弘 (2015)『「実践者」と「研究者」の協働による学習観を探る実践研究 元生徒との「座談会」の場によってもたらされる可能性』『言語文化研究』, 13, 97-116.
- 山田真紀 (2021)「学習効果と充実度の高い遠隔授業の方法とは: 椙山女学園大学 2020 年度前期の授業アンケートの再分析より」『椙山女学園大学教育学部紀要 = Journal of the School of Education Studies』, 14, 307-323.

資料1

Narrative Frame の分析によって導き出されたコードのまとめ(前期の一部のみ)

前 期			
セレクトイ ブ・コード	アクセル・コード	切片 数	コード(番号は切片番号) 例
コミュニケー ションや、ネッ ト環境に関わ るもの	コミュニケーションの障 害など	5	また、対面でないのでコミュニケーションが取りにくいな と思いました。40
	インターネットの環境	1	たまにネット環境が悪く思うようにいかないことがあるの でネット環境を良くしていきたいです。38
	伝わりにくさ	8	画面越しだと先生や友達に伝えたいことが伝わりにくく大 変です。37
	機器の障害	1	機材トラブルなどで先生の指示を聞き逃す、ということも あるが 22
	孤立感	1	自宅の自室でオンライン授業を受講しているので、クラス メイトが一人もおらず、とても寂しいです。2

資料2

ナラティブ・フレーム(該当箇所のみ)

長くなっても構いません。

英語学習に関する調査用紙

注意事項：まず最後まで目を通した後で、空白の部分を中心に自由に記入してください。なお、極力全体が1つの物語になるように考えて書いてください。(ID )

英語と私 打ち込む時は黒字にしてください

高校時代私の英語学習について述べます。高校の英語の授業で印象に残っているのは \_\_\_\_\_

....

現在は Zoom で授業を受けていますが、 \_\_\_\_\_

教室での講義と比較すると \_\_\_\_\_

....

これで私のレポートは終わります。